

特集 試される宗教リテラシー

イスラム教の知識を学ぶ授業を通して 宗教リテラシーを身につける

—宗教について深い理解を持った人材育成—

中嶋（川瀬）寧々¹

宗教に対し誤解がないよう、人々は宗教リテラシーを身につける必要がある。「宗教について深い理解を持った人材」を増やすためにどのような授業が必要か検討し、授業を実施した。生徒の感想を分析しながらその成果について考察していく。

¹ なかじまねね：国府台女子学院講師

1. 2023年——宗教問題と必要なこと

古代から宗教は存在しているが、宗教を取り巻く文化は日々変化している。また、宗教についての問題も日々起きている。私は「宗教リテラシーを身につける授業の開発—宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材—」¹⁾という、宗教リテラシーを身につけるための授業研究論文を2019年に執筆した。それから4年の月日が経つが、その間、誰もが想像もしなかったような事件が起きた。安倍晋三・元首相の殺害事件である。「捜査関係者によりますと、山上被告は捜査段階の調べに対し、母親が多額の献金をしていた「世界平和統一家庭連合」、旧統一教会に恨みを募らせた末、事件を起こしたなどと供述したということです。」²⁾とNHKのニュース記事でも報じられており、旧統一教会の活動が事件の動機に関与している可能性があると言われている。

この事件をきっかけに、宗教二世問題は注目を集めるようになった。そして、その深刻さが浮き彫りになり、書籍なども多数売り出され、問題を目にする頻度が明らかに増えたに違いない。国内で大きな関心を集めている今だからこそ、宗教に対し誤解がないよう、人々は宗教リテラシーを身につける必要がある。特に、これからの日本を担っていく若者に対しては、宗教を建学の精神としているような学校のみならず、国公立の学校でも積極的に宗教を知る時間を設けるべきであると考えます。

作家、ジャーナリストで正覚寺住職でもある鶴飼秀徳氏は、「旧統一教会問題が生じたのも、社会全体の宗教に対するリテラシーの低さがあると考えます。日本が真の共生社会を目指すためには、宗教にたいする学びと理解が欠かせない。」と考え「公立学校において「宗教」の科目は必要か？」³⁾という記事を書いている。そこでは、安倍晋三元首相の国葬での違和感、大学の授業での学生の様子など具体的な事例を挙げながら、日本人の宗教リテラシーが低い事実を述べている。また、「①行為の目的が宗教的意義を持ち②行為の効果が宗教に対する援助、助長、促進又は圧迫、干渉等になるような行為」になっていなければ、政教分離違反といえないのだ。したがって、公立学校が宗教の歴史や概論のよう

表1 「公立学校において『宗教』の科目は必要か？」についての回答

公教育に宗教の科目を入れることを賛成	67.2%
公教育に宗教の科目を入れることを反対	23%
どちらでもない	9.8%
その他	0%

な授業を実施することは何ら、問題がないはず」というように、日本の制度として、国公立学校が教育の中で「宗教」を扱うことに問題がないことを示している。しかし、国民の感覚として、国公立学校が教育の中で「宗教」を扱うことをどのように考えるかは見えてこない。さらに、鶴飼氏は「公立学校において『宗教』の科目は必要か？」⁴⁾というアンケートを2023年1月20日～3月31日に実施した。投票の結果は、表1の通りである。

投票数が61票のため、このアンケートの回答を国民の感覚として取り上げるのは難しい。しかし、他にこのようなアンケートを取ったデータが存在しないため、この結果を参考として日本国民の感覚を探っていく。

上記の結果を踏まえると、公教育に宗教の科目を入れることに賛成する人が半数を超えているが、反対をする人も一定数存在する。では反対に投票した人の意見を参照しながら、どのようなことが教育現場で宗教を扱う際の懸念事項になってしまうのか紹介する。「特定の宗教について肩入れして教えるのには絶対に反対。信仰は個人で決めるもので刷り込まれるものではないし、単に歴史について知りたいのであれば歴史/社会科などで教えればよいだけの話。一方で宗教との関わり方や、カルト宗教への対策などは道徳などで対応すればよい。わざわざ科目を新設してまでする必要はない。」先述したのは、反対に投票した人の実際の意見の引用の1つである。反対に投票した人は、概ね、宗教を教えるということに対する懸念を持っている。そして、その多くは、特定の宗教に教えが偏ってしまい、信仰を刷り込まれてしまうというイメージを持つようだ。また、科目として宗教を扱うことには反対をする人がいる

が、宗教自体を扱うことは求めているようである。

社会でも道徳でも宗教の授業でも、どのような時間でも可能である全ての教育現場に普及できるような汎用性のある宗教の内容を扱った授業を開発すべきではないだろうか。2006年の教育基本法改正により宗教の一般的教養を教えることが明記されて以来、宗教を扱うことに対するハードルは以前よりは明らかに下がっているように感じる。

2. 社会に求められている宗教リテラシー

宗教リテラシーはどうして社会に求められているのか、どうしたら身につけることができるのか、2023年になって発表された、いくつかの論考を通してまとめていく。

中外日報は社説で「宗教リテラシー 宗教軽視は日本文化の弱点に」⁵⁾という記事を書いていた。「日本人の多くは、日本の宗教についてうまく理解できておらず、そもそも宗教とは何かについて、自分に関わりのあることとして理解しにくいと感じている。」と日本人の宗教観について述べている。また、宗教リテラシーを育むために、「学校での宗教教育を充実させるというのは一つの有力な考えだ。だが、公立学校でどのように宗教教育を行うのかについて、十分に議論されておらず、理解も進んでいない。他方、道徳・倫理、国語、社会・地理・歴史・公民などで実際には宗教に関わる題材がしばしば扱われている。しかし、それを宗教として取り上げ、学ぶという姿勢が足りないのだ。」と、学ぶ場の少なさを問題として掲げている。そして、その解決策として「宗教を主題化して学ぶ場を広げるということだ。学校教育においても、学問領域においても、論壇や報道といった場においても、もっと宗教を大きな話題として取り上げるということだ。そのためには、高等教育において宗教の研究教育を重視する必要がある。日本の文化や社会、思想の理解において、宗教の持つ意義にもっと注目すべきである。とりわけ、儒教や神道、民俗文化における宗教性をどう捉えるかという問いを深めることだ。宗教軽視は将来にわたって日本文化の弱点ともなりかねない。宗教

について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者が増える必要がある。」と記述している。

著述家であり、芸術文化観光専門職大学教授の山中俊之氏は、2022年7月に「日本人の「宗教偏差値」が世界最低レベルになった3つの理由」⁶⁾という記事を書いている。「世界宗教偏差値」があるとしたら、日本はおそらく世界最低レベルです。理由はいろいろありますが、私は次の三つの影響が大きいと考えています。」という書き出しで、日本人がどうして宗教リテラシーが低いのか理由が述べられている。その理由として、「地理的な理由」「神道がもともとあり、その上に仏教を受け入れた」「江戸時代の檀家制度と明治以降の国家神道」の3つを挙げていた。日本人の宗教リテラシーを上げるためには、我々が日本ならではの宗教性を持つことに気づくこと、つまり中外日報の記事で述べられていた「宗教について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者が増える必要がある。」のだろう。

『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』⁷⁾で牧師で宗教学者の小原克博氏は、「宗教の聖典や歴史などを細部にわたって勉強することが必要なのではなく、その人は遠い外国から来たかもしれないけれども、いま同じ社会に住んでいる、一緒に生きている。そんな隣人たちが尊んでいるものを、自分も尊ぶことができるような境地に達する宗教リテラシーを、きちんと底上げすることができれば、日本の民主主義の豊かさにつながっていくと思うんですね。」⁸⁾とこれからの日本人のあるべき宗教リテラシーを身につけた姿について述べていた。記述を踏まえ、宗教について、深い理解を持つだけでなく、人々は自身と異なる宗教、文化を持っている存在に対し、重んじることができてはじめて宗教リテラシーが身についたと言えるのだろう。上記を身につけるために、具体的にどのような教育を現場は行うべきなのか。次の章で考察していく。

3. 宗教リテラシーを身につけるために 教育に求められていること

中外日報は「宗教について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者が増える必要がある。」と述べていたが、どのような教材が必要なのか検討する必要がある。

教材を考えるにあたり気をつけなくてはならないのが、特定の宗教に偏っていないかという点である。藤原聖子氏は自身の著書である『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』⁹⁾で、倫理の教科書の内容の1つとして、「ブッタの思想に学ぶ」という節を取り上げて解説している。また、この箇所は明らかに、「単に宗教を伝達しているのではなく、「ブッタの教えはあなたにとって大切な指針になる」と価値判断を下し、読者である生徒にそれを受け入れるよう促している。」と述べている。そしてこれは宗派教育にあたるという懸念を挙げつつも、キリスト教やイスラム教の説明にも同様の記述があれば問題はないと発信している。だが、引用したこちらの教科書は、それを満たせていなかったため、国公立学校で使用するにあたり適した教材とは言い難いものになっていた。このように、既存の教科書を用いるとしても、特定の宗教に偏った表記がないか確認をしなくてはならない。また、中には宗教の知識の説明において偏見や差別的表現を用いている教科書も存在している。「なぜこのような教科書の偏見が見逃されてきた原因をより広くとらえれば、「関心のなさ」という問題があるかもしれない。」¹⁰⁾と述べられている。生徒はもちろん、高校で教える教員ですらあまり関心を持っていないという要因が挙げられている。宗教について、とりわけ日本の宗教について深い理解を持った識者を増やすためには、何かしらの工夫が必要なかもしれない。

さらに、2つの授業実践を具体的に考察していくことで、日本の宗教について深い理解を持つことに繋がるきっかけを見つけていきたい。3.1.では元・東京都杉並区立和田中学校校長の藤原和博氏（以下藤原氏）、3.2.では2019年度に私自身が行った授業実践を再検討していく。

実践校は、千葉県にある私立国府台女子学院である。当時は大学院生の立場で授業実践を行ったが、現在は仏教（宗教）科の教員として勤務し、中学生、高校生の仏教の授業を担当している。

3.1. よのなか科の授業実践

先述の通り、実際にどのような授業が行われているか実践をみていく。

「よのなか科」の授業は、「元東京都杉並区立和田中学校校長の藤原和博氏が提唱している「学校で教えられる知識と実際の世の中との架け橋になる授業」のこと。教科書を使った受身の授業とは異なり、自分の身近な視点から世界の仕組み、世の中の仕組みなど、大人でも簡単に答えを出せないテーマを扱う。」¹¹⁾ また、教材はSRJの商品であり、学習塾・小学校・中学校・高校・専門学校など幅広い教育機関で導入されている。

今回考察を行う「宗教について考える」授業は現代社会編の1つであり、「その1」と「その2」が存在している。まずは「その1」から考察していく。「その1」の授業、ワークの流れは表2の通りである。

1.～3.までの授業は知識の習得に力をいれた内容であるが、4.に関しては能動的な授業となっており、大変興味深いものであった。宗教団体

表2 よのなか科の授業「その1」

1. 宗教とは何か考えてみよう。	(1)「宗教」という語句の意味 (2)「宗教」と聞いたときに持つイメージ
2. 日本の生活と宗教のつながりを見てみよう。	(1) 次の質問に、YESかNOで答えよう。 (2) 日本の宗教に関するデータ ①日本には宗教団体がいくつあると思うか？ ②信者数の総計から気づいたことを書こう。
3. 世界三大宗教を見てみよう。	
4. もし宗教をおこすとしたら？ ～教祖ロール・プレイング～	①教団名(〇〇教、〇〇会など) ②教義(教え) ③儀式(セレモニー) ④理想の人間像(信者育成)

の立ち上げの仕組みを自分ごととして捉えることが可能となる。ただ、この授業に関しては生徒が1.~3.の授業で、宗教の魅力を理解し、教義について何らかの気づきがないと、このロール・プレイングは意味をなさなくなってしまうのではないかと考えた。生徒が遊び半分で適当な宗教をつくることや、創唱宗教（新宗教含む）へのバイアスを生みかねないことを懸念している。この授業によって宗教が意外に自身に近い存在であることや、日本の宗教について新たな気づきも得られるとは思いますが、それは一時の興味や関心に過ぎないのではないかと感じ取れた。また、日本の宗教に関するデータを知ることで、日本の宗教を理解したとは言い難い。どうして日本は、さまざまな宗教の文化が根付いているのか、その背景も知らなくてはならないだろう。上記は次のセクションで述べる、筆者が2019年に国府台女子学院にて行った授業実践にも言えることであった。

続いて、「その2」¹²⁾の内容についても考察していく。「その2」の授業、ワークの流れは表3の通りである。

「その2」に関しては、「その1」の内容を踏まえ、より宗教を身近に考える工夫がなされている。宗教の理解へのアプローチ①では、「人気の

表3 よのなか科の授業「その2」

1. 宗教の理解へのアプローチ①	(1)「人気のテーマパークやブランド」と「宗教」 (2)「人気タレント」と「宗教教団の教祖」 (3)「ファン」と「信者」
2. 宗教の理解へのアプローチ②	質問 どんな状況・心境のときに神様や仏様に頼りたくなるか書いてみよう。
3. 宗教の理解へのアプローチ③	質問 次のような意見を持っている人に、どのように反論するか書いてみよう。 『ちゃんと努力し、しっかりと自分自身を持っている人は、宗教に頼ることはない。宗教を信じているなんて、弱い人間のすることだ。』
4. 人間にとって宗教とは何か？ ～私の意見～	「人間にとって宗教とは」という書き出しから、自身の意見を書いてもらうワーク。

テーマパークやブランド」と「宗教」の共通点や「ファン」と「信者」の違いなど、普段使う言葉と宗教に関する言葉を並べて相違点を可視化している。ただ、ここでも注意すべき事項がある。それぞれの言葉は意外性があり興味を引くきっかけには成り得るのだが、意図を理解できず違和感や嫌悪感を持つ人もいるかもしれない。「ファン」や「信者」からみて、「人気タレント」と「宗教教団の教祖」が横並びになっており、同じ要素を持つと言われたらそれぞれ納得がいかないという感想を持つ人もいるだろう。例えばこのようなワークを行う前に、アイドルという言葉は偶像や崇拜される人や物という意味合いを持つ、日常的に使う言葉の中には宗教的な要素を含むものもたくさんあるなどと、説明した上でワークの意図を示しつつ、実施しなければ授業内容の理解に繋がらないと感じた。ただワークを実施するだけではなく、話者の言葉選びも重要である。

言葉選びに関しては、宗教の理解へのアプローチ③の言葉にも別の懸念がある。ケーススタディは生徒主体の学びとなるため、生徒がどのくらい理解をして、学んだ情報を使いこなすことができるかを見ることができると、大変興味深いのだが、『ちゃんと努力し、しっかりとした自分自身を持っている人は、宗教に頼ることはない。宗教を信じているなんて、弱い人間のすることだ。』という言葉自体が大変強いものに感じる。一面的にしか宗教をみることができない人に対し、宗教はどのようなものか説く以前に、伝え方の語気の強さなどの他の視点に目がいつてしまい本筋と異なることを書き始める生徒が出てくるのではないだろうか。また、仕返すように、強い言葉で反論してしまう生徒もでてしまうのではないかと考えた。そのため、人と異なる意見を持った際、どのように自分の意見をつたえるかなど別の要素の学びを1つ入れることができたかと考えた。授業の受け手である生徒が誤解のないような説明を行うことを常に心がけなければならない。また、宗教の理解へのアプローチ③や4.「人間にとって宗教とは何か?」のような自由度の高い記述ワークは意図とずれないように、回答を誘導しない伝え方でワークの意義も伝える必要があるだろう。教師側からの指示も明確になるよう

に気をつけなければならない。特に宗教の理解へのアプローチ②に関しては、自身のことを振り返りながら記載すべきなのか、それとも一般的にどのように考えられているかを検討するのか、指示を明確に行わなければ、書き出すことが難しい生徒もいるだろう。懸念点をいくつか挙げたが、このワークを通して、自身の宗教に対しての考え方を深めること、そして日本の宗教について深い理解を持った人材を増やす見込みはあると感じられた。生徒がどのような反応を示しているかを繰り返し分析することで、この教材の真価を発揮できるだろう。

3.2. 宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材の再検討

宗教リテラシーを身につけることを目的とした、グローバル化社会の中で活用できる宗教の知識やそれを踏まえた行動を、マンガ教材を通して生徒が行うことができる教材を開発し、中学高校の仏教(宗教)科で実践を行い、教材の有効性や課題を明らかにしたのが、先述した2019年に行った授業の実践開発である。以下に概要をまとめる。

授業は国府台女子学院で2018年11月に実践した。受講者は中学部2年3組37名、高等部2年3組44名、高等部2年5組41名である。

グローバル化社会の中で活用できる宗教の知識を学び、それを踏まえた行動を、マンガ教材を通して、生徒が実践を想定して行うことができる教材を作成し、用いた。マンガ教材を用いる理由は、宗教の取っ付きにくさや負のイメージを、マンガを通して払拭することやマンガを通して宗教をデフォルメ化することによって生徒の関心を引くことが可能になると考えたためである。宗教リテラシーを習得できたかどうか判断するために、3つの段階を設定した。3つの段階を達成できれば、実践の効果があつたと評価する。これらが習得できたかは、授業前と授業後に生徒へ実施したアンケート、授業の感想、授業内における生徒の様子で判断していった。以下が3つの段階である。

1つ目は、日本の宗教文化や価値観の理解を深められたか。

授業を通して、多くの生徒は、日本の宗教文化や価値観を十分に理解していた。無宗教とは一体どういう意味で使われる言葉かを伝えること

で、日本人の宗教観、無宗教の意味を他の宗教観を持つ人々に語れる能力を養うことができた。しかし、すべての生徒が無宗教の意味を書き出すことができなかつたことやよく考えられていないと読み取れる回答もあったため、自分ごととして考えるまで、生徒の意欲を掻き立てることができなかつた。

2つ目は、死生観について宗教を通して深めることができたか。

高校生は、深めることができていた。中には普段日本人にとってなじみの薄いイスラム教の思想を知った際に、イスラム教の思想に共感できる点を見出す生徒もいた。しかし、中学生の中には、自身が考えていた死生観がどの宗教に基づいていたのか授業を通して考えることができた生徒もいたが、自身の死生観を考えたことがなかつた生徒も多くおり、活動の最中に戸惑う姿も見られた。「死」に対してのイメージが想定できない生徒に配慮し、マンガを取り扱ったが、生徒のイメージの補完は、物語を通して達成できなかつた。

3つ目は、宗教を信仰する気持ちにいかに寄り添うことができるか。

結果としては、日本人の宗教観や文化を見つめ直すことによって、授業の前よりも、宗教を信仰する気持ちがわかると答えた生徒が増えた。また、授業を通して、「日本人は特定の宗教を持たないため、宗教に対して寛容になれる」と考え、自身の立場から宗教と向き合うことができる生徒もおり、自分ごととして宗教について考えることが可能となり、宗教を信仰する気持ちに寄り添う姿勢も見られた。多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになることができていたかは、具体的に宗教の知識を役に立たせることを目的とした活動を行うことがなかつたため、成果として達成できたと断言はできない。

我々は、自分ごととして深く宗教を理解できる教材を作る必要があるだろう。2019年の授業実践は宗教を学ぶきっかけ作りにはなったが工夫や手法に拘りを持った結果、内容を精査することができなかつたようにも感じる。また、マンガを使用することで宗教のマイナスなイメージは払拭でき、イメージの補填に役に立つ場面もあったが、生徒に対し宗教を学ぶ意義を伝えきれなかつたと考えた。2019年の授業実践では、

宗教知識を用いた判断・運用能力として宗教リテラシーを定義して、それをいかに身につけることができるかに着目していた。しかしそれだけではなく、自身とは異なる宗教を信仰する人々を認め、寄り添う姿勢を身につけるための深い理解が必要であると、現在の社会、日本人の宗教リテラシーの低さを通してあらためて感じるようになった。では、宗教について深い理解を持つことを目的とした授業はどのようなものなのか、次の章で検討していく。

4. 宗教について深い理解を持つことを目的とした授業の検討

本章では、実際に宗教について深い理解を持つために、どんな授業が適しているのか考察していく。

上越教育大大学院の塚田穂高准教授は朝日新聞の記事¹³⁾で「教科書を見ると、中学「社会」の地理では世界の宗教分布はもちろん、世界の人々の暮らしと関連した諸宗教の習慣、タブーなどを扱っています。歴史では仏教やキリスト教、イスラム教の起こり、世界史の背景にある宗教の動きを説明しています。高校でも従来の日本史・世界史・倫理などに加え、「地理総合」で宗教と生活を手厚く扱うようになりました。「公共」では、消費者問題の中で靈感商法を載せています。単なる知識だけではなく、様々な国の人々がどんな価値観をもち、どんな生活をしているのか、異文化理解、多文化共生に主眼を置いた「宗教文化教育」が進められています。学校現場と教員の置かれた状況を考えると、無責任に「何かを新たにせよ」と言うのではなく、今ある枠組みで工夫し、内容を充実させることが現実的です。」と述べている。実際、「地理総合」では従来より宗教について講じる機会が増えている。しかし、それとは逆に「公共」や「歴史」では多くの事柄を学ぶことが要求されており、相対として宗教の扱いが小さくなっているのが現状である。そのため、学校教育のなかでは、宗教を講じる機会が減っているのが現状となっている。また「靈感商法」を扱うことは大切だが、それだけでは宗教の負の側面しか扱うことができない。今ある枠組みで工夫し、内容を充実させ

ることが現実的というのであれば、負の面だけでなく、宗教の魅力も伝える必要があるだろう。「公共」では「第2章 人間としてよく生きる」という章で宗教についての内容を扱う機会がある。宗教があることにより、共通の習慣や文化を持つようになったこと、宗教は人々の間をつなぎ、その宗教を信じる人々の社会の基礎ともなっていること、宗教は人間の生き方や社会のあり方に大きな影響を与えてきたことなど、宗教の正の面も扱うべきである。

さらに、内容を充実させるために必要なこと、それは宗教の表面的な知識のインプットではなく、教義も扱うことだ。具体的には、キリスト教の黄金律の考え方や仏教の縁起の思想など古代から現在、そして今後も続いていく宗教ならではの考え方である。自分が今当たり前のように行っていること、感じていることなどの根幹に触れる時間をつくることで、自己理解ができるようになり、自分の持つ宗教性なども知ることになるだろう。最終的にそれが異なる宗教、文化を重んじることができる宗教リテラシーを身につけることに繋がると考える。

では、上記のような内容を教育現場で扱うことができるのだろうか。3.1.と3.2.では、教育実践を通して、宗教の教義を深く教える必要があると述べたが、宗教の教員免許、ならびに宗教に知見を持つ教員が国公立の教育の現場にいるほうが珍しい。だが、知識としてのみならば、教義を丁寧に教えることはどんな教育現場でも可能であると考えた。その際、1.で取り上げたアンケートや3.でもあったように、特定の宗教について肩入れをして教えることはないよう配慮が必要である。

勤務校では、「仏教」科というカリキュラムの枠組みで、仏教以外の宗教についても教える時間を設けている。それは、宗教リテラシーを持つためには欠かせない時間なのだ。多文化、他宗教を知らなければ、自身の考えも深まらず、気づきや学んだことを実践的に活かすことに繋がられないのだ。2019年の授業やよのなか科の授業などでも、生活の中で活かすことを想定しているが、生徒が宗教の知識を自然と活用ができるようになる、また、宗教の知識は実生活において必要なことであると自覚し、学びたいと思うような気持ちを育むことはできていないのでは

ないだろうか。足りないものは教義そのものの魅力を生徒に伝えきれていないことだと考える。上記を踏まえ、勤務校ではさまざまな宗教の教義も欠かさず教えるようにしている。

仏教校でキリスト教やイスラム教の内容を扱う授業を行うこと、つまり自身と関わりが浅いと感じている宗教について学ぶことで、深い宗教理解を達成することができるのなら、国公立の学校でも宗教は授業で扱うことができるのではないかと仮定した。また現状では、私立宗門校と国公立学校ではカリキュラム構成をはじめとする前提の違いは多くあるが、まずは、自身と親しみのあまりない宗教を生徒は受け入れることができるのか、学ぶこと自体にどのような感覚を持つようになるのか、今回の実践を通して情報を得ることを本研究論文の目標にしたい。さらに、宗教知識を教えることで、異なる宗教や文化を重んじることはどこまで達成できるのかも同時にみていく。

5. 授業実践

中学2年生にイスラム教についての知識を教える授業を行った。簡単に授業の概要を以下に説明する(表4)。

この授業は、中学2年生の5クラス、193名に実施した。期間としては、1学期4～6月の約3ヵ月間、枠組みは週に1回の道徳の代替となる仏教の授業で行った。授業時間は全8回である。

授業の目的は、生徒に正しい知識の習得をさせ、宗教リテラシーを身につけさせることさらに宗教について深い理解を深め、宗教を信仰する人に対し寄り添う姿勢を身につけさせることである。そこで、知識を深めることで異なる宗教や文化を重んじることができたかどうかは授業の様子やアンケートをみて考察していく。

授業の工夫点として、授業の効果がより浮き彫りになるよう、教師は極力自身の考えは発さず、生徒にどのように感じるか毎時間投げかけるように心掛けた。また、自分ごととして捉えられるように、イスラム教に関するさまざまな情報を与えるようにした。工夫点として、身近な出

表4 国府台女子学院での全8回の授業内容

内容	生徒の実際の様子
<p>【1回目】 イスラム教についての基本情報を伝える。 7世紀のはじめ、アラビア半島でムハンマドが開き、神（アッラー）に絶対的に従う宗教であること。二大宗派があり、それぞれどのような特徴をもっているか。また、ムハンマドは信仰の対象ではないことを細かく伝えた。</p>	<p>基本的な知識を淡々と覚えていた。 シーア派とスンニ派の違いに戸惑いながら理解しようと努めていた。</p>
<p>【2回目】 ムハンマドの生涯について話す。 アラビア半島のメッカに生まれたことや生い立ち、結婚、そしてジブリールとの出会いから、イスラム教の教えを伝道するようになったことを、口頭で伝えた。その際、みんながムハンマドの立場だったら「どのように感じる?」「どのように行動する?」などと、適宜問いかけながら説明するように心がけた。 また、偶像崇拝が禁止されていることをただ、禁止事項として知るのではなく、その理由も含め学んでもらった。また、聖戦（ジハード）が「神の教えに従って努力する」という意味が本来はあること、現在はどういうに使われているかなど、由来や理由も知ることができるようにした。</p>	<p>ストーリー仕立てで、ムハンマドの生涯について話したため、前回よりもイスラム教に興味関心を持った生徒も増えているように感じた。ムハンマドの生い立ちや苦しんだり、悩んだりする姿に、親近感を覚えているようであった。また、漢字とアラビア語で表現される言葉、聖戦とジハード、聖遷とヒジュラなどの言葉を覚えることに大変力をいれていた。</p>
<p>【3回目】 イスラム教のイメージの変革 イスラム教についての基礎知識、その歴史を十分に学んできた段階で、マンガ教材を用いた導入を行った。2019年と異なる点は、既存のマンガを用いたことである。今回の授業では、『サトコとナダ』¹⁴⁾というマンガを、導入の時間に生徒に見せることにした。全編を紹介できないため、アメリカ合衆国の大学に通う日本人留学生サトコと、彼女のルームメイトでありサウジアラビア出身のイスラム教徒であるナダの文化交流を描いたマンガであることをはじめに説明した。 実際に取り扱った内容は、以下である。 『サトコとナダ』1巻 p. 86 マーシャーアッラー p. 95 メッカ マンガを導入に用いたあと、今回は六信について説明した。 神、天使、啓典（クルアーン）、預言者、来世、天命について順番に説明していく。クルアーンの説明をする際、ユダヤ教の聖典であるヘブライ語聖書（旧約聖書）、キリスト教の聖典である新約聖書の説明も行い、他の宗教の説明も適宜行った。</p>	<p>1、2回目の授業を受け、イスラム教に厳格なイメージを感じている様子であったが『サトコとナダ』のマンガを通して、イスラム教徒が実際にこの世界で生活しているということ、近い未来自身も関わる可能性があることに気づくことができ、イスラム教を身近に感じているようであった。 国や文化、宗教が異なれば、さまざまな価値観があるということも理解できるようになり、イスラム教徒が信じる6つのこと（六信）を大切にし寄り添う姿勢を養えたためか、真剣に話を聞いている生徒がほとんどであった。</p>

【4回目】今回も再びマンガ教材を活用した。

実際に取り扱った内容は、以下である。

『サトコとナダ』

p. 9 かぶりもの p. 10 おなまえ

p. 11 ラマダーン p. 96 秘密道具

p. 101 方角

さらに、実際に礼拝のアプリである「Muslim Pro - コーランアザーン、イスラム教」を使いながら、礼拝について説明を行った。そのあと、五行である信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼の説明を行った。信仰告白は実際にどのような言葉を唱えるかまで説明を行い、イスラム教が一神教であることを今一度説明した。また、その際、アッラーとムハンマドは異なる立場であること、信仰はアッラーのみとなることを教えた。

断食に対し、反応があったため、宇宙飛行士やスポーツ選手は断食の期間はどのようにしているのか、またそのようなことを決めるのはイスラム法学者であることを説明した。

アプリを起動し、使用することで、イスラム教徒がこの世界で共に生きているという実感がさらに沸いたようであった。

また、授業内でイスラム教は厳格なイメージが強かったため、時代と共に文化をアップデートしているイメージがなかったと驚く様子も見受けられた。

五行を知ると、自分と重ねた意見を発する生徒もでてきた。ときには「めんどくさそう」「自分ではできない」というような声も上がったが、それを大切にしているイスラム教徒に対しての批判の声ではなかった。中には経験したら、イスラム教徒の気持ちがわかるのかもしれないと、積極的に寄り添っていく姿勢を見せた者もいた。

【5回目】今回は、日本財団のYoutubeチャンネル¹⁵⁾にアップロードされている「【礼拝は1日に5回!】日本人とトルコ人のムスリム夫婦に1日密着してみた」¹⁶⁾という動画、五行が1日のうちにどのように行われているか、イメージを掴んでもらうことを意図とし見てもらった。

そして、イスラム教の文化について伝えていった。豚肉を食べることができないことや、豚肉以外の肉も折りを捧げ食用にしたハラール食品でないと食べることがないことを説明した。また、お酒が禁じられていることや、ヒジャブで頭部や身体を覆わなければならないことを教えた。

今までイメージの補填として使用していたマンガは、アメリカ合衆国が舞台だったが、今回見た動画は、日本が舞台で今現在も日本に暮らすイスラム教徒の夫婦であることからより親近感が生じていた。中には、「会いにいけるんだ」と呟く生徒もいた。また、日本の中でイスラム教徒同士が日本で助け合って生きていることに気づいた生徒も多くいた。

豚肉が食べれないことを受け、「こんなに美味しいのに、もったいない」という声も上がったが、それが我慢ではないということも理解し、イスラム教徒の人が豚肉と知らずに、豚肉を口に運びそうになったら止めてあげたいなど、現実の出来事に落とし込んで、学んだ知識をどう活かすかをよく考えていた。

【6回目】前回、ヒジャブについて興味を示している生徒がいたため、種類やヒジャブを使ったオシャレについて紹介した。また、今回は、イスラム教と日本の関わりとして、インドネシア味の素事件¹⁷⁾や『鬼滅の刃』¹⁸⁾のブルーレイおよびDVD第4巻の特典CDにイスラム教に関わる音声の不適切な使用の判明した記事¹⁹⁾を取り上げ、社会で宗教リテラシーが欠如していたため問題が起きてしまった事実を伝えた。特に後者について説明する際、アニメックス側が悪いという言い方は決してせず、生徒にどうしてこのようなことが起きてしまったのか、二度とこのようなことを起こさないためには何が必要か考えてみようとしてだけ促した。

生徒は嬉しそうにヒジャブやニカブの説明を読んでいて、形や色など選択肢が豊富なことを知り、ルールはあるけれどもその中で最大限に楽しんで生活していることも伝わったようだった。また、日本で起きた出来事を知り、生徒はとても驚いていた。特に『鬼滅の刃』の問題においては、大変衝撃を受けていた。感想にもあったが、「授業でこのような内容を知り、今後気をつけることができるわたしはラッキーだった」という記述もあり、生徒は宗教の授業を受ける意義をも見つけていた。知らないことが誰かを傷つけてしまうことに繋がってしまうという危機感も覚えていた。

【7回目】導入で日本人の宗教リテラシーが低いという記事を導入で取り扱った。その後、一夫多妻制度の説明と、どうして一夫多妻制度が存在するのか話した。また、報復、報復の拡大、血の代償という言葉に触れながら、ハンムラビ法典とイスラム教の考え方の結びつきを話した。ここまでの、知識のインプットの時間である。

6回目ですべて具体的な問題や事件を知ったため、生徒は日本人の宗教リテラシーが低いと思われている事実にも納得しているようであった。また、一夫多妻制度に対し、最初は理解できないという反応を示していたが、理由を知ったことで受け止めている様子であった。また、ハンムラビ法典はすでに社会科で習った内容であったが、社会で習った内容と宗教の授業の繋がりを感じ、教科を横断的に学ぶことに生徒自身が意義を感じているようであった。また、報復という言葉の強さに、最初は戸惑っている様子であったが、報復がこれ以上広がらないようにするためにある考え方だと知り、画期的であるということを理解しているようであった。

【8回目】最後に生徒のアウトプットの時間を設けた。アウトプットの形として、イスラム教についての新聞を作成してもらった。ただ、新聞を作るだけでなく、ターゲットはイスラム教について知識のない自分と同じ中学生という設定にした。そして、授業の感想を書いてもらった。

生徒の多くは、授業で自分が興味や関心を抱いた内容を中心に新聞作りを行っていた。また、授業を受けてより知りたいと感じたことを積極的に調べ、内容に反映させていた。中には教師も知らないような内容も必死に探してきてまとめている生徒もいた。さらには、他の宗教との比較や宗教全体の話しに派生させるなど、イスラム教についてただ内容をまとめるのではなく、自分が感じるイスラム教の魅力をまとめたり、日本人に知って欲しいと思うイスラム教の知識を考えたりと、新聞を通してより深く思考している様子も見受けられた。

来事やイスラム教徒の文化をマンガ教材やニュース記事を紹介したり、動画を流したり、さまざまな媒体を手段として用いたことが挙げられる。

イスラム教は、日本における多くの人々にとって馴染みのない文化や風習をたくさん持っている宗教であるため、知識を得るだけでも生徒はさまざまな感じ方をするであろう。この授業では、最後に授業の感想を生徒185名（受講者のうち8名が欠席）に尋ねた。授業の感想になるため、生徒の回答の自由度はとて高くなる。自由であるからこそ、生徒が本当に理解したこと、感じたことが見えてくるだろう。その回答を参考に、生徒の知識の理解度を測りつつ、より深い理解を持つことができるか分析していく。生徒の意図と異なる解釈をしないために、回答は生徒の記述をそのまま利用している。そのため、曖昧な表現も中には存在している。

理解度は5段階で下記の表5の項目に分けることにした。

1段階目である、イスラム教について興味関心は見られず、抽象的な授業の感想を述べている生徒の割合は全体の4%である。また、2段階目のイスラム教について興味、関心がありつつもまとめるまでには至ら

表5 生徒の理解度の段階分け

1段階	イスラム教について興味関心は見られず、抽象的な授業の感想を述べている。 例：楽しかった。面白かった。
2段階	イスラム教について興味、関心がありつつもまとめるまでには至らない。宗教・異文化に寄り添う姿勢はない。 例：私はめんどくさいことがものすごく嫌いで礼拝や断食をめっちゃめんどくさく感じた。私にはとても無理そうでした。
3段階	イスラム教について学んだことが、まとめられている。 例：イスラム教の守らなくてはいけないことには全て意味があるということに気づくことができた。断食と絶食は異なることを知った。
4段階	イスラム教について学んだことと自分の考えや経験をまとめている。 例：ヒジャブはおしゃれを制限するものではなく、守られているように感じた。
5段階	イスラム教について学んだことと自分の考え、生き方、社会のあり方など、多角的に宗教について考えを深めることができている。さらに、異なる宗教を重んじる姿勢を持っている。 例：知らないでイスラム教徒の人を傷つけてしまうこともあり、もっと日本でも知って欲しいと思った。みんなが思いやり宗教を理解し、もっと豊かになってほしいと思った。

ない、または、宗教・異文化に寄り添う姿勢はない。生徒の割合は13%であった。つまり、イスラム教の知識や教義を丁寧に教えたが、理解にまで到達できなかった生徒は全体の20%未満であった。つまり全体の80%以上の生徒が理解はできているのであった。特に、一番多いのは3段階を達成できた割合で41%、その次に4段階目で25%、そして5段階目は19%であった。また、4段階目、5段階目にいると判断した生徒の感想はイスラム教に対し、よく思考しているものが非常に多い。そのため深い理解に到達できたのは、44%であった。4、5段階目の記述の一部を以下にまとめ、適宜分析しながら見ていく。

4段階目と評価した感想は以下である。今までイスラム教に対しどのようなイメージを持っていて、授業を受け、どのような印象が変わったかなどをまとめている意見が多くあった。またどのような気づきが生まれたか、よく自分の中で整理できている生徒もいた。

- 豚を食べれないことをかわいそうと思っていましたが、自分たちの生活に合わせているだけで、かわいそうでもなんでもないと過去の自分を恥じました。
- イスラム教徒の方がイスラム教をどのような気持ちで信仰しているかにふれ、だからこそ宗教についてもっともっと理解をもっていくことが大切なのかなって思いました。宗教について深く知ることによって宗教の持っている役割、重要性について少しわかるようになった気がします。
- ムスリムのひとは我慢しているわけではなく自発的にやることに気づきました。
- イスラム教の人たちは豚肉を食べてはいけなだけでなく、食べたくないことに気づいた。
- 日常生活や社会で習ったことが仏教にも繋がっていると感じた。
- 生きている場所が違うだけでこんなにも生活が変わることを知り、一度わたしもイスラム教徒の生活を体験したいと思った。
- イスラム教について学ぶ前、私は1日5回礼拝をしたり、頭部をヒジャブで覆わなければいけなかったり、表面的な知識のみで、信者たちは辛くないのかな、大変じゃないのかな、といったイスラム教徒ではない考え方をしてきた。しかし、本当のムスリムの人はそんなことは思わず、神を信仰し、ムハンマドを信じてきたと知り、今までと違った新しい価値観を知ることができた。一夫多妻制が戦争未亡人を救うためだと知り、イスラム教徒の気遣いがこのような制度を作ったと思うと心の優しいひとたちばかりなのだと感じた。
- 自分の普通と他の文化で生活している普通が違うことをしっかり理解した上で、様々な方々と関わっていく必要があるなと感じました。今後は、人は十人十色であり、考え方も生活の仕方も多様であるということを常に頭に入れながら周りの人たちに接していきたいです。

- イスラム教に対し、怖いイメージを持っていた。しかし喜捨の考え方は良いと思うし、何より何も知らずに勝手に恐れるのはやめようという教訓になりました。
- ムハンマドは民衆と共に働き、時には教えを守るために戦争を行ってきた良心のあるひとだからこそ、今でもイスラム教を大切にしたいと思う人が大勢いるのではないかと思います。いつかムスリムの人など仏教徒ではないひとの意志を尊重し、親しく交流できたらなと思いました。

以下は、授業内容だけではなく、自身の体験を感想に記していたものである。

- 私が通っている小学校にムスリムの男の子がいました。給食ではなくお弁当を持参していましたが、あるとき水も飲まず、お弁当も持参していない時期がありました。ずっと疑問に思ってもやもやしていましたが、授業を受けてわかりました。
- 2日前にムスリムのひとを電車でみました。授業で習わなければ、なぜヒジャブを着ているかわからなかったと思います。
- この間おでかけしたときに、ハラール商品が売ってたので買いました！美味しかったです。

さらに、イスラム教の魅力を見出していた感想もあった。また、今後自分はどのように行動すべきか考えを深めた感想もあった。これらは、授業内で私が何かを発したわけではなく、生徒が自身で思考し見つけたものである。

- ヒジャブはおしゃれを制限するものではなく、守られているように感じた。
- 日本にいるムスリムのひとは不便だからこそお互いに協力していいなと思った。

- 礼拝は自分の心をスッキリさせているものなのかなと感じた。
- 仏教の時間は自分のことも考えられる時間となった。
- 怖い宗教だと思っていたが、戦争未亡人を助けたり、救貧税等の助け合いをしたりしてとても素敵な宗教だなと感じました。
- もっとイスラム教について学んで、知らずに粗相をしてしまわないようにしたいです。
- 自分が大人になって問題を起こさないようにイスラム教だけではなくキリスト教についても知りたいと思った。
- 授業のおかげで、ムスリムの人にあったら学んだ知識を活かせると思いました。

5段階目と評価した感想は以下である。世界や日本の社会がどのようなものになっていくと良いか、学び得たことをもとに検討した内容を記述している生徒がいた。以下の感想を読むと、知識を習得するだけでも、深く理解を行うことが可能であることがよくわかる。また、異なる宗教や文化を重んじる心も養うことができているため、5段階目は宗教リテラシーを身につけることが達成できているとも判断できる。

- 知らないでムスリムの人を傷つけてしまうこともあり、もっと日本でも知って欲しいと思った。みんなが思いやり、宗教を理解し、もっと豊かになってほしいと思った。
- ハラル認定されたお肉が普通のお肉と味がそこまで変わらないと聞いて、だったらスーパーにも置いてもらって一般人も食べればいいと思った。日本の宗教知能も上がると思う。
- 最近では礼拝の時間を知らせてくれるアプリや、礼拝の部屋を設けたり、ムスリムに対する理解も進んでいてすごいと思います。ハラルの認証があるお店など日本にも少しずつだけ増えてきていることを知り、これからもそれぞれの文化を尊重して理解のある世界になってほしいと思った。

- イスラム教のひとが快適に暮らすために、礼拝する場所を増やしたり、ハラール商品を置いているお店が増えるといいと思った。
- いつか仕事や旅行で違う宗教の国に行ったときや、仕事場にムスリムの職員がいた時に役に立つと思います。一人でも多く宗教の多様性やルールを知っている大人や子供が増えるといいなと思います。
- ムスリムのひとはいつも身体を覆っていて「暑くないのかな大変そうだな」と思っていたけど、色々バリエーションがあって「なんか着るの楽しそうじゃん！」って思った。今は男女の性別をなくそう！という動きが世界であるが、ムスリムのそういうルールは今後どうなっていくだろうと疑問を持ちました。まだまだ世界にはイスラム教以外にも多種多様な宗教、文化があるし、それぞれのルールがあるからそういうことを全部受け止めて協力、助け合うことがわたしたちにできることだと思います。あとグローバリズムで宗教がなくなってしまうか心配です。
- 日本にも多くのムスリムがいると知り、イスラム教を身近に感じるようになりました。また、まず宗教を知ることが大切だと思った。偏見を持っている人にも宗教を知ってもらい、それについて理解してもらえれば、多様性をもっと広がると思った。
- 宗教に関する問題は、法に触れるかだけではなく、その宗教を信じている人々の気持ちも一緒に考えなければならないと解決できないと気づきました。もっと多くの人々が宗教に関心を持ち、問題が減ったらいいと思います。
- イスラム教徒の女性がヒジャブを被らなかつた、体の一部を出していたという理由で拘束されたり亡くなったりするニュースをみました。女性の自由がもっとある国になってほしいな。と思いました。

さらに次の2つの感想を分析していく。

- 仏教の授業を受けてからイスラム教の女性に対する考え方が変わった。以前はヒジャブを着ている女性を見かけると、「イスラム教では女性を卑下している」というイメージが強くなるとなく後ろめたい気持ちになっていたが、授業を受け、女性もイスラム教に支えられているのだと感じた。また同性愛がイスラム教では禁じられていることを知り、多様な人々への理解の実現を目指している現代社会では、イスラム教徒とLGBTの人々との対立が起きていないか心配になった。そういった対立を防ぐためにも他人（異教徒）への理解を深めるために仏教という教科を学んでいきたい。

上記の感想は、イスラム教や信仰心が信者にとってどのようなものになっているかまで、理解を深めることができていた。さらに社会で問題となっていることにも触れ、異教徒への理解を深めることがどのようなことに繋がっていくのかまで思考をめぐらすことまで達成できていた。

- 弟にイスラム教のイメージを聞いたときに、イスラム教に限らず宗教とは危ないもの、詐欺と習ったとっていて、授業の内容を話すとなんな意味があるんだとわかってくれた。イスラム教をあまり知らない人について教えたいと思いました。

授業で習ったことを家庭で話し理解を深めたという報告を受けることがしばしばあった。この感想もその1つである。家庭でのなにげない1つの話題だったのかもしれないが、このような行いが、さらに広まっていくと宗教リテラシーを持つ人が日本の中でも増えていくだろう。生徒の弟は、宗教とは危ないものであり、詐欺であると教わったとのことだが、実情どのように教わったのかはわからないが、それが事実なら、教師の宗教に対するリテラシーを一刻も早く高めなくてはならない。ま

た、4.で「公共」では、消費者問題の中で靈感商法を載せているという話を取り上げたが、もし宗教についての知識がそこでしか扱われることがなければ一面的な印象のみで宗教をどのようなものか判断してしまう。宗教に関する一面的な知識や誤った考えが広がることは、誰かを傷つけてしまうことに繋がってしまう。今回の事例は、まさに宗教を信仰するすべてのひとを偏見を持ち、差別的に見てしまうようなきっかけにも繋がってしまう危険性がある。どんな宗教を信仰していたとしても、信仰の自由があること、それを特異なものとして扱わないこと、価値観や人間形成を宗教を通して育んでもらいたい。そして、宗教に対して深い理解を持てる人間になって欲しい。

さらにそのように伝えたわけでもなくとも生徒にそのように伝わってしまったのなら、伝え方に問題があるのだろう。宗教に関しての発言はより配慮すべき事柄が多い。宗教の知識や教義は国公立の学校でも扱うことができると考えていたのだが、まずは教師も宗教について深く理解をする必要がありそうだ。感想を経て、現状の課題が1つ見つかった。この問題は、教師が目の前の課題をこなすことで精いっぱい、なかなか宗教について知識を増やすことができない実情を踏まえつつ、教育業界全体で検討していかなくてはならないものとなる。

6. 授業、感想に対しての考察とまとめ

今回の実践では、感想をもとにイスラム教に対して深い理解を行うことが達成できたかを分析してきた。その結果、8割の生徒が興味関心を持ち、イスラム教の知識を理解することを達成することができていた。また、全体の4割の生徒はイスラム教について深く理解をしているようであった。この結果から、何か特別なワークや工夫をしなくても、丁寧にイスラム教の知識や教義を教えることによって、生徒は宗教の知識を理解することができ、そのうちの半数は深い理解が可能となることがわかった。また、この結果が、馴染みのない宗教や文化を学ぶことでどのような感じ方をするかを知る基準にもなったであろう。1段階目である

4%の生徒は攻撃的であったり、マイナスな内容を書いているわけでは決してない。今回は授業の最後に感想をとったが、学期の途中でその4%がどのような生徒であるか把握し、その層に向けてアプローチをしていくことで、生徒全員の理解度を上げていくことができると考えた。授業を実施する教師の負担を考慮すると、どのようなカリキュラムを行うべきかまだまだ吟味する必要はあるが、宗教を学ぶことで生徒は新しい気づきや学ぶことの楽しさ、思考力、それらがあらゆる他者を価値のある存在として尊重する能力に結びつくだろう。

また、生徒の感想を通し、教師も宗教について深く理解をする必要があることがわかった。中央教育審議会が2021年に提示した、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」²⁰⁾では、「日本人の子供を含め、異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる取組」を必要としていることを明言しており、そのために「学校における異文化理解や多文化共生の考えが根付くような取組促進」「異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる普及・充実、教員養成」を唱っている。上記を達成するためにも、教師の宗教に対する理解度の向上、ならびに宗教リテラシーを身につける必要があることをあらためて認識した。宗教を学ぶためのカリキュラムの検討、授業実施の前に、まずは、教師が宗教について深い理解を持った人材になることが必要となる。

先述した通り、国公立の教師が、目の前の課題をこなすことで精いっぱい、なかなか宗教について知識を増やすことができない実情があるのは理解している。ただこれは、授業に必要な知識のインプットではないと考える。人として生きていくために必要なマナー、リテラシーの一つである。人を殺してはいけない、盗みを働いてはいけない、そのような価値観は、哲学や宗教がもととなった。教育現場は、生徒の学力・知識のみを伸ばす場所ではない。人間形成をする場所でもある。宗教を学ぶことは人間形成の一環ともいえるのではないだろうか。専任の講師を雇うなど、授業の運営の仕方はさまざまな検討ができると思うが、できたら教員自身も宗教リテラシーを身につけて、教育現場で知識を用いて欲しい。授業をするだけでなく、異なる宗教を持った生徒への対応と

してもその知識は必ず活きるだろう。

日本人が宗教リテラシーを身につけるためには、我々がいかに当事者意識を持って宗教と向き合うかにかかっている。生徒に理解を促す前に、まずは大人が考えるべきであると今一度感じさせられる授業実践となった。そして生徒の感想を参考に成果を得ることができた。このような成果を積み重ね、宗教を教育現場で扱う優位性が、目に留まるようになったら、かねてから問題になっていた、宗教を学ぶ場の少なさも解決に繋がるかもしれない。

注

- 1) 川瀬寧々「宗教リテラシーを身につける授業の開発—宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材—」『授業実践開発研究』第12巻、https://ace-npo.org/fujikawa-lab/file/pdf/bulletin/2019/06_kawase.pdf (2019)
- 2) NHK NEWS WEB「安倍元首相銃撃事件山上被告“旧統一教会への恨みが事件に”」(2023/07/08) (最終確認 2023/09/30)
- 3) 鵜飼秀徳「公立学校において「宗教」の科目は必要か？」<https://surfvote.com/issues/a10w6u8315gh> (2023/01/20) (最終確認 2023/12/18)
- 4) Polimill (ポリミル) Surfvote 開票結果「公立学校において『宗教』の科目は必要か？」<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000062.000088829.html> (2023/04/17) (最終確認 2023/09/30)
- 5) 中外日報「宗教リテラシー 宗教軽視は日本文化の弱点に」<https://www.chugainippoh.co.jp/article/editorial/20230526.html> (2023/05/31) (最終確認 2023/09/30)
- 6) DIAMOND online「日本人の「宗教偏差値」が世界最低レベルになった3つの理由」<https://diamond.jp/articles/-/306893> (2022/07/28) (最終確認 2023/09/30)
- 7) 島蘭進, 釈徹宗, 若松英輔, 櫻井義秀, 川島堅二『徹底討論! 問われる宗教とカルト』NHK 出版新書、2023年
- 8) 同上、p.155
- 9) 藤原聖子『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』岩波新書、2011年、p.4-5
- 10) 藤原聖子『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』岩波新書、2011年、p.134
- 11) EDUPEDIA「よのなか科～現代社会の諸問題編～「宗教について考える(その1)」

- <https://edupedia.jp/archives/17981> (2023/07/22) (最終確認 2023/12/20)
- 12) EDUPEDIA「よのなか科～現代社会の諸問題編～「宗教について考える(その2)」」
<https://edupedia.jp/archives/17987> (2023/07/22) (最終確認 2023/12/20)
- 13) 朝日新聞 DIGITAL「宗教教育の現状は? 上越教育大大学院の塚田穂高准教授に聞く」
<https://www.asahi.com/articles/ASR444SXNR3YPCVL004.html> (2023/04/05) (最終確認 2023/09/30)
- 14) ユベチカ『サトコとナダ 1巻』星海社 (2017/07/08)
- 15) 日本財団 YouTube チャンネル <https://www.youtube.com/@NipponFoundationPR>
- 16) 同上「【礼拝は1日に5回!】日本人とトルコ人のムスリム夫婦に1日密着してみた」
<https://www.youtube.com/watch?v=1EqOllEjTRI> (2021/11/05) (最終確認 2023/12/19)
- 17) Cilsien - SEAsia Info Clips「インドネシア味の素事件」 <http://cilsien.info/factsheet/factpage%E3%80%80> (2001/01/09) (最終確認 2023/09/30)
- 18) 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』2016年11号から2020年24号まで連載された週刊少年ジャンプのマンガ
- 19) J-CAST ニュース <https://www.j-cast.com/2019/11/22373414.html?p=all> (2019/11/22) (最終確認 2023/12/19)
- 20) 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_10.pdf (2021/1/26) (最終確認 2023/09/30)